サービスラーニングで学んだこと

社会福祉学部社会福祉学科２年　酒井　寛豊
活動先：NPO 法人菜の花　放課後児童クラブ　こどものいえ
ゼミ：野尻　紀恵　先生

菜の花を選び事前訪問した際に、私は驚いた。先生からは高齢者ということを聞かされていたのだが、着いた場所は学童保育所であった。子どもは好きではあったが、将来子どもと関わる仕事には就かないと自分自身で思っていたので、どうしたらいいのだろうと不安を持ったのを覚えている。しかし、決まってしまったことはどうしようもない。割り切って６日間の活動に臨んだのである。

今振り返れば、私は小学生と関わるにあたって、自分を立派な人間に見られるようにと見栄を張っていたと思う。よい言葉づかいで話そう。見本となる行動を心がけよう。そのようなことばかりに気を取られていたのである。実際に子どもたちと関わってみると、そんなことは必要ないと気づかされた。堅苦しい感じだと子どもたちとの間に距離が生まれうまく接することができない。そういう煩わしさは捨てて、自然体で接することが大切だということを実感したのである。

６日間の活動の中で子どもたちが呼びやすいようにニックネームをつけてほしい、と活動先の担当者の方に頼まれた。なかなか考え付かなかったので好きなメジャーリーガーのニックネームをもらって「とぅ～ろ」と決めた。最初は呼んでくれるか不安だったが活動を通して子どもたちと馴染むにつれ、呼んでくれる子が増えたことはとてもうれしく思った。同時に子どもたちからはオリジナルのニックネームをつけられた。子どもたちは下品な言葉が大好きなのでいろんな名前をつけられた。気づいたことは、子どもの思ったことをニックネームにしたほうが覚えてもらえるということである。私が小学生だったころも友だちがニックネームを作ってくれて自分からつけるということはなかった。友だちになる始まりというのは、ニックネームをつけることからなのではないかと気づいた。同時に子どもの頭の中は言葉の宝庫であるなと感じたのである。

私たちは５人のグループで活動をした。活動先の担当者の方から今年のテーマは忍者だということを聞き、私たちも忍者をテーマに企画を立てることにした。私たちは人数が多かったので２人１組になって活動をした。そのため企画を６日分たてたが全部の企画を同じ人間で受け持つわけではなく毎回違う人間が担当した。そのためグループ内での意思疎通の協力が求められた。６日間の活動は１日目が折り紙で手裏剣づくり。２日目が忍者飯作り。３日目がプラ板でしおりづくり。４日目が指導員さんの似顔絵制作。５日目が指導員への手紙づくり。６日目が家族への手紙づくりという流れである。私は２日目の忍者飯作りと３日目のプラ板でしおり作りを担当した。忍者飯作りは餃子の皮にコーンやチーズなどを包んでホットプレートで焼いてもらおうというものである。材料を準備して説明をしてこれでできると思っていた。しかし、その考えは甘かった。具をうまく配分ができず

取り合いになってしまう、餃子の皮をうまく包めない子が続出した。私たちの計画の甘さを実感したのである。もっと計画を綿密にたて実施すべきであった。３日目のプラ板でのしおり作りもミスをしてしまった。子どもたちに好きな絵をかいてもらい焼く工程は難しく危険もともなうので私たち大学生が担当することになった。しかし、トースターの温度の加減でうまく焼くことができずせっかく書いてもらったプラ板を歪ませてしまい、子どもをがっかりさせてしまった。幸い予備のプラ板があったので再び作ってもらうことができたがその子にとっては自信作だったので大変申し訳なく思った。今回の企画で気づけたことは企画なんて失敗して当たり前。そのあとその失敗をどう生かすかが重要かということである。そのときそのときで失敗してしまったら臨機応変に対応する。そのような力を身につけることができた。それらは私が成長したと実感できたことである。

活動をさせていただいた、NPO 法人菜の花では学童だけでなくデイサービスのような介護のサービスも充実している。それらは子どもからお年寄りまで誰もが住みやすい街づくりを目指しているからだと思う。今回お世話になった「こどものいえ」のある場所は半田市の乙川地区で半田市の他地域と比べて人口が増加している地域でもある。子どもの割合も他の地域と比べても高い。半田市の学童の数は 15 か所あり乙川地区の学童の数は 2 か所である。地域の人口に比べて子どもの放課後の居場所となりうる学童の数が足りていない現状がある。学校から家に帰って家族がいる子はよいのだが、両親が共働きで家に帰れない子は学童のような居場所が必要になる。そういった需要に学童のような子どもたちが安心して集まれる場所が少ないのが課題である。サービスラーニングで学ぶ上で地域とのつながりがとても重要なのは理解していた。しかし、実際に現場に行ってみると地域とのつながりが希薄になっている現状を知った。学童を利用するということは 1 日の流れが朝起きて学校に行き、終わったら学童に行く。学童の終了時間になったら保護者が迎えに来て家に帰る。家と学校、そして学童のサイクルで近所の人やおじいさんおばあさんとの交流が全くないのではないかと考えたのである。保護者が子どものためと思って入れた学童も結果的には子どもから地域交流の場や時間を奪っているのではないかと私は考えたのである。また、半田市役所を訪ね地域課題を伺ったところ高齢者は高齢者。障害者は障害者。子どもは子どもの通所できる場所はあってもどんな人でも気軽に訪れられるような場所が少ないとおっしゃっていた。誰もが気軽に訪れられる居場所づくりがこれからの地域課題の解決につながるのではなのではないだろうか。「こどものいえ」の方針としては学校ではできないことをやってみよう、自分の思ったことをやってみようという方針であった。この学童で培った自分で考え行動する力が未来の街づくりに繋がっていくのではないかと私は考えた。子どものときに学んだ力が将来の街づくりの力となり、住みやすい街となる。子どものときにお世話になった学童を自分の子どもも利用する。そのような地域ができたときに初めて地域のつながりが大切にされていると言えるのではないだろうか。私はサービスラーニングを通して、地域のつながりとは何十年後も変わらない街を作り出していく「輪」のようなものではないかと考えたのである。